

内に移行し、門脈血中インスリン濃度は末梢血中インスリン濃度の2倍以上であった。この1年間に14例の肝切除術を施行したが、手術開始2時間目よりインスリン非投与群との間にケトン体比は有意の差があり、インスリンの門脈内投与群の方が良好であった。

18) Mirizzi 症候群と考えられた2例

後藤 真・内藤 彰
 畠山 重秋・阿部 惇 (新潟県立中央病院)
 齊藤 秀晃 (内科)
 高木健太郎・小山 高宣 (同 外科)

症例1:72才, 男性. 平成3年11月, 全身倦怠感, 上腹部痛が出現. 黄疸を指摘され, 腹部超音波にて胆嚢結石, 肝内胆管拡張があり, 入院. ERCにて総肝管の前後の圧排, 肝内胆管の拡張を認め, Mirizzi 症候群を疑い, 手術施行. 胆嚢癌合併が認められたが, 総胆管狭窄は炎症波及によるものと考えられた.

症例2:59才, 男性. 平成3年9月, 黄疸を指摘され, 入院. ERCにて総肝管の軽度全周性狭窄, 左肝管狭窄, 左肝内胆管拡張があり, 胆管癌と鑑別が困難であったが, 手術施行. 慢性胆嚢炎の波及による, 胆管狭窄と認められた.

今回, Mirizzi 症候群と考えられた2例を経験したが, 術前診断における ERC の有用性を確認するとともに, 閉塞性黄疸の鑑別診断として忘れてはならない疾患であると思われた.

19) 閉塞性黄疸に対する Expandable metallic stent を用いた胆道内瘻術

渡辺 雅史・須田 剛士
 齊藤 崇・田中 泰樹
 森 茂紀・早川 晃史
 八木 一芳・小黒 仁
 塚田 芳久・成澤林太郎
 上村 朝輝・朝倉 均 (新潟大学第三内科)

閉塞性黄疸に対し, expandable metallic stent (EMS) を用いた胆道内瘻術を施行したので報告する. 【対象および方法】悪性腫瘍5例(胆管癌2例, 膵癌1例, リンパ節転移2例)と術後狭窄2例の計7例である. stent は自主製作した original type の Gianturco stent を使用した. 【結果】stent の挿入は全例で成功し, 6例で外瘻チューブが抜去可能であった. 経過観察期間は3~54週(平均22週)で, 無黄疸生存は5例(3~54週, 平均28週), 無黄疸死亡は2例(3週, 13週)であり, 現在までのところ黄疸が再発した症例は認めていない. 合併症としては, stent の破損と移動が1例ずつみられたが, 臨床的に問題となるような症状はなかった. 【結論】EMSによる胆道内瘻術は, 従来問題であった内瘻チューブの閉塞や逸脱を解消でき, 肝内胆管の内瘻化も可能であることから, 患者の QOL 改善に有用であると考えられた.